

---

# このこのこ！～男の娘のこんな日常～

風

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

このこのこ！〜男の娘のこんな日常〜

### 【Nコード】

N7675Z

### 【作者名】

凧

### 【あらすじ】

私立天翔学園高等学校 この学校に入学したのは、どこにでもいるような男の娘！？

## プロローグ 「主人公は××系」 (前書き)

不定期更新になりますが、よろしくお願い致します。それじゃ主人公のアカリちゃんヨロシク。

「僕の名前は、アカリじゃないです。えーっと、このセリフ読めばいいんですね。こほん、青春に必要なのは 「友情」 「ラブコメ」

「男の娘」 ……って僕は男の娘じゃないーい！！

## ブログ 「主人公は××系」

「月アカリさん好きですっっ！！付き合ってくださいっっ！！」

2011年 春 4月も終わりに近づき今年僕は、必死の受験勉強の結果無事合格した「私立天翔学園高等学校しりつてんしょうがくえんこうとつがく」の体育館裏に呼び出されて今まさに告白された。

「無理です。」

それを僕はソッコーで断る。

「……えっ？」

「それじゃあまた明日。」

僕は今告白断った田中君（多分）の横を通り過ぎようとして・・・

「ちよっちよっと待ってください！」

田中君（多分）に道を塞がれた。

「どっとうしてですか！？せめて理由いやっ少しでいいから考えてくれまs「無理です。本当に。」

僕は、さっき告白を断ったときより早く返事をする。

「だからなんでっ」

「落ち着いて、別にぼくは田中君のことを嫌ってないし嫌悪感すら持っていないよ。逆に友達になりましたよっって言われたら嬉しいぐらいだし。」

「じゃあ友達以上にみえないってこと？後、田中じゃなくて田代です。」

と田中君じゃなくて、ええっと田代君だ。は冷静にツツコミをいれ

ながら聞き返してきた。

「いや・・・その・・・なんというか・・・その」

実は僕、この手の告白の返事は中学生時代からなれている。しかし、理由の説明だけはどうしてもなれない。むしろ、ある意味なれたくない。

「いつ言わなくちゃダメかな？」

むしろ、言いたくない。

「はいっ」

田代君はきっぱり返事をした。

「僕はきちんと明確な理由で月さんを好きになりました。例えば・・・」

田代君は頼んでもいないのに、僕の好きな理由をきちんと説明していった。・・・はあ百パーセント理由行っただ後の傷口広くなるよなああますます言いたくないあ。

「例えば、月さんの透き通るようなソプラノ声は誰の心にも染み込んで心地よくて、」

・・・いやいや僕にとってそれコンプレックスの1つなんだけど。

「そして月さんの髪は、まるで芸術品のようにサラサラで、」

あつ今のは少し嬉しかったな、高いリンスにはちみつ入れた特性リンス使ってるからね。これが結構髪にいいんだよね。

「もちろん外見だけじゃないです。」

まだ、あるのかあ。

「この前の調理実習のときに作ってくれた。あの炒め物すんごくおいしかったです……」

いやっ あれは結構手抜き料理なんだけど。

「そして、このまえ僕の制服のボタンがとれた時のあの裁縫の腕前はつきり言ってプロ級です。」

裁縫にプロ級とかあるのかなあ？

「他にも・・・うん、分かった。分かったからもうやめて。」  
「やばい、本当にいい図らくなった。」

「それじゃあ、お願いします。きちんとした理由を説明してください。」

[illegible]

もう、嫌だ逃げ出したい。てゆーかそんなに僕のこと見てるなら理由にきずけよっ！別にその理由隠してないし、なんで逆にきずかないの！！？もおー！ー！本当に。これはもう腹をくくるしか無いのか！！

「月さん、お願いします。振られるのは仕方ないけれど、理由もなしに振られるのは嫌です。」

田代君は、追い打ちをかけるように迫ってきた。いや、だからさ理由聞いて傷つくレベルがもう核爆弾並なんだよ経験から。

「う、あ、その、あの、いや、」

「月さん！」

・・・もう無理、この状況もう無理。

僕は腹をくくった。

「田代君。」

「はい。」

「・・・僕苗字月じゃないし、名前もアカリじゃないんだけど。」

「・・・えっ？」

「・・・僕の苗字がつきあかり月明狩なんだ。」

「・・・すすいません、いつ今までできずかなくて。」

田代君が慌ててあやまる。逆に謝りたいのこっちなんだけど。

「いやっ、いいよ。よく間違われるし。」

本当に。

「そうなんですか？」

「そっそれで、本当の名前が、その、えっと。り、っ、って言うんだけど。」

「えっ？すいません聞こえませんでした。」

「・・・りゅ、っ、」

「えっ？」

「・・・りゅと」

「はいっ？」

「ぼっ僕の本名は、つきあかり月明狩りゅと竜人」

「・・・！！」

田代君はようやく気がついてくれた。

そう、僕、つきあかり月明狩 りゅうと竜人が

男だということに。



## 第一話 「幼馴染は狼系」

2011年4月26日

「んーっ・ふう。」

僕は自室で大きく背伸びをした。

「さ・て・と」

ピピッと鳴った携帯のアラームを素早く止めて、時間を確認した。

AM4時30分

「よし、時間ぴったし。」

これは僕の癖で、アラームが鳴る1分前には起きて背伸びなんかし  
たりして本格的に準備をしようとするものだ。そして、なんでこん  
なに早く起きるかと言うと僕には色々仕事がある。

「今日のお弁当はどうしようかなあ。」

僕は、寝巻きの上からポンチョを着てつぶやいた。

「セイヤはもう少しお肉食べたいって言ってたけど・・・栄養バラ  
ンスかんがえるとなあ。」

セイヤと言うのは僕の幼馴染でれっきとした女の子なんだけど・・・  
まあ説明は後にして、やることやんなくちゃ！

「んーと、昨日はハンバーグだったから少し焼かなかったあまりが  
あるから。うん、ピーマンの肉詰めにもするか。後他にも・・・」  
そんなことを考えながら、洗濯機のあるお風呂場に行く。

「その前に、洗濯物干さなくちゃ。」

すぐに頭を昨日の天気予報に切り替える。確か今日は、晴れだったはず。一応テレビをつけて、確認する。・・・うん合ってた。

「ココ姉は好き嫌い激しいからなあ、今日はどうしよう。」

時間後

）  
1

「ふう。」

僕は、あさの仕事を一通りかたずけてココアを飲んでいた。

「全く、セイヤはあれほど何回も注意してるのに下着を洗濯機に入れるんだから。」

ぶつくさと文句言いながらココアを一口飲む。うん美味しい。

「僕だって思春期の男子なのになあ。」

本当は狙ってやってるのかな？ いやないか、そんなことしてもあまり意味ないしね。

「多分もう無意識のうちにやってるんだろうな。」

まあその理由もわからなくもない。ふと、窓ガラスに写った姿を見る。そこには、寝巻き姿の上にポンチョを軽く羽織った髪の長い綺麗な美少女がいた。

「……………てゆーか、僕なんだけどね。」

はああああああああ 口に出すとなお落ち込む。

そつ、僕「月明狩竜人<sup>つきあかり りゅうと</sup>」は見た目は完全に女の子だ。

この見た目のせいで、僕は大変な思いをしてきた。

例えば、昨日の田代君のような例 あれが一番困る。なぜなら、A君と言う人がいたとする。A君と僕は普通に仲良くしているとすると同性なんだから当たり前だろう？ それなのにA君は完全に僕のことを女の子だと思う。

僕の通っている「天翔学園高等学校」略して、「テンガク」はそれなりにマナーを守っていれば私服登校OKなのだ。僕は数少ない制服組みで、この見た目との相乗効果でさらに目立ってしまう。しかし、この時代「ボーイッシュ」と言うような言葉もあるし、「ボクっ娘」と言うことばもある。簡単に言ってしまうえば、僕を女の子と勘違いするのは当たり前というものだ。しかし、自分のほうから「僕は男だからね。」と言うのもなんかプライドみたいなものが許さない。そんなこんなで僕は、週2のペースで告白されてしまう・・・

・・・男子から。  
ちなみに、僕の幼馴染が僕のことを「アカリ」と呼ぶのでよく本名を「月<sup>つき</sup>アカリ」と勘違いする人も多い。

「まあ、後数週間すれば僕が男だってことが分かってくるだろうな経験からして。」

僕は、ココアを飲みきってかたずける。今の時間は5時38分まだ時間はある。

「さてとお風呂にでも入ろつと。」

僕はお風呂場に向かった。僕は、お風呂が大好きだ。細かく説明すると髪を洗うのが好きだ。そのため、特性リンスを作ったりして髪の手入れは欠かしたことがない。こうゆう所も、セイヤに女の子っ

ばいていわれるけど。好きなんだから、しょうがないしょうがない。

「ん〜んん〜んんん〜んん〜ん」

僕は服を脱ぎ始めながら鼻歌を口ずさむ。そしてシャワーを浴び始めて、髪を洗おうとシャンプーに手をかけたとき・・・

「あっ」

しまった、着替えを忘れてしまった。けど今脱いだ下着着るのもない。あ。

「仕方ないか。」

僕は、シャワーを止めて体と髪を軽く吹いてバスタオルを体に巻いて自分の部屋に戻った。

ドアを開けたとき、ふと違和感があった。

「・・・・・・ベットが乱れてる。」

それだけじゃない、下着をしまっているタンスが少し開いている。さらにベランダの窓が開きっぱなしだ。洗濯物を干したとき鍵を締め忘れていることはじつは多い、しかし学校に行く前務必ず確認するので防犯に関しては大丈夫。だけど、窓を締め忘れるなんてありえない。そして決定的なのは・・・・

「・・・・・・は・・・・・・あ・・・・・・はあ・・・・・・」

微かに聞こえる人の呼吸音しかもクローゼットから。

「・・・・・・（ゴクリ）」

僕は少し緊張しながらもクローゼットに手を掛け・・・・思いつき



「さっさあねえなんでだろうね！アハハハハ

」セイヤはわざとらしく笑った プチッ

「そう・・・質問その2・・・僕の下着をしまってるダンスが少し開いてるんだ。それでさあその手に持つてるの何？」

僕は続けて質問する。

「あの・・・その・・・あーーーーーいつのまに！」

セイヤは大げさに僕の下着を見てリアクションを取る。 プチッ

「じゃあね最後の質問いい」

僕は冷たい声でセイヤに聞く。

「なっなに」

セイヤは怯えた声で返事をする。

そしてきっぱりと僕は言う。

「死ぬ前に何か言いたいことある」

「・・・」

セイヤは凍りついた。

「さあ、早く」

自分でも信じられないほどの怒りを抑えるの難しいから早くして欲しい。

「・・・分かった。アカリ聞いてくれ。」

「っ！ なっなに。」

急に真面目になったな、もっもしかしてわざとじゃなくて何か理由があったとか

「……………」  
「……………」

「……………アカリってやっぱり大事な所隠すと百パーセント女の子だよな。」

「へっ!?!……………あっ」

今の自分はバスタオル姿と言うことを忘れていた。

「いや————!! 眼福 眼福」

「……………  
……………  
……………  
……………  
……………  
……………  
……………  
……………  
……………」

ブッチン

「えっ、今の音」死ね——————  
「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」

僕は机の上の分厚い参考書を思いっきり叩きつけた。

「ウォ——————ン」

## 第二話 「運命の少女は毒舌系」

2011年4月26日

「すいませんでした!!」

セイヤが土下座している。

「知らない!!セイヤなんてもう知らない!!」

僕は、自分でも分かるぐらい目に涙を貯めて起こっていた。

・・・あつ、ちなみに土下座してるほうがヒロイン（一応）で怒ってるほうが主人公（一応）です。普通逆だと思っけれど、まあ色々あるんです。

AM7時03分

セイヤに一撃くらわせた後、さすがにやりすぎた・・・とは思わず。とりあえず僕の部屋にセイヤ改めこの犬っころを置いておくとまた何かされそうなので、ロビングのソファに放置していた。そして約1時間後セイヤが復活した。

そして、第一声が・・・

「うーん、よく寝た。さてアカリの部屋あさりに行くか。」

んで、直後僕がいることに気がついて僕とのやり取りを思い出して、冒頭のシーンにつながる。



「なんで起きたら僕の部屋をあさりに行くんだよ!」

「本当にごめん!」

「知らないったら知らない!」

「とりあえず、お願いだから朝ごはん作って!」

「今言うことかー!っ!」

「だって、アカリがアタシの分の朝ごはん作ってくれないんだもん!」

「今そんな話してないでしょう?!」

「じゃあ、なんの話?」

「だ〜から〜!! はあもういいや。」

怒り疲れてどうでもよくなってきた。

「じゃあ、朝ごはん作ってくれる?」

この犬っころ。

「罰として朝ごはん抜き!!」

「ワooooooooooooン!!」

ここまでの状況説明・・・朝から飼い犬のしつけをしています。

「クウン クウン」

「全く、なんであんないたずらするかな本当に。」

「ワン?! ワンワンワンワンワン」

「落ち着け、完全に犬化してるぞ。」

冷静に突っ込む。

「スーハースーハー・・・あーあーよし戻った。アカリさ、一応ア

タシ高一女子なんだよ!」  
深呼吸で戻るんだ。

「だからなに。」

「いやいやいやいや!だから・・・その・・・なんでそんなことしたかを聞かない?」

「うーんそういえば、じゃあなんで?」

「えっ!」

「えっ、じゃないでしょう。朝忙しい時にあんなことして、何か理由あるんでしょう?ほら行ってご覧もう怒らないから。」  
第一聞けと言ったのはセイヤのほうだ。

「いや・・・その・・・だから・・・あたしは・・・あなたが・・・すく（ピピピピピピピピ） なっなに」

「あつ時間だそろそろいかなないと遅刻しちゃう。行くよセイヤ。」  
携帯のアラームを止めて言う。

「えっいやまだ理由言ってないし、着替えてないし、何より朝ごはんは?」

「だからないよ。」

「ウォーーーーー」

「先行くよ。」

「ワンワンワンワン」

「いつてきまーす。あつ鍵いつものところにあるから。きちんと戸締りよろしくね。」

そう言い残し駆け足で家を出た。

「ワンワン」 「ボタン」

さて急ぐか。

「テングク」は大通りに出れば、直線で距離もそんなに無い。しかし、その大通りにでるには僕の家と「テングク」の位置の関係上そこそこの道を歩かないといけないのだ。そこで僕は……

「仕方ない、時間ないし「暗闇通り」<sup>くやみど</sup>を通るか。」

暗闇通りと言うのは、学生などが遅刻しそうなときに使う裏道だ。ビルと雑木林に挟まれていて、いつも暗いのでその名が付いた。学校側はひったくりなのが多い・不審者が出るなどの理由で通ることを禁止しているが、背に腹は変えられないのでしょうがない。

「ここが暗闇通りか確かに暗いな。」

実は僕この暗闇通り使うのは初めてである。

「なんせいつもは、余裕をもって家から出るもんな。」

ちなみにセイヤはいつもギリギリでこの暗闇通りの常連らしい。後、セイヤのご飯はいつもはきちんと作ってはある。

「飯抜きは少しひどかったかな？ いやいや、あんぐらい当然だよ全く……そういえば、いたずらの理由なんだっただろう？ ……」

まあいいか。」

そして暗闇通りを4分の3ほど通り過ぎたかなと考えていた頃。いきなり後ろから声をかけられた。

「おい！そのねえちゃん！」  
・・・無視して走る。

「お前だよ、その学生服のお前！」  
・・・はあ、分かっているけどやっぱり僕か。

「・・・なんですか。」  
動かしていた足をとめて後ろを振り向くと、どこにでもいるようなしたっぱAみたいなおじさんがいた。

「ちょっと、金貸してくんないかんあ。困ってんだよ。」  
うわあ、ひくぐらい典型的なカツアゲのセリフだな。後、カツアゲするやつのは性別ぐらいきちんから見極める。

「・・・残念ながら僕お弁当派なんで、購買用のお金すら持って無いですけど。」

「んじゃあ、手間が省けたな。」  
「はっ？。」

「金が無いんじゃないだろうがねえ・・・体で払ってもらおうか。」  
パチンとしたっぱAが指を鳴らすと雑木林から7人ほど似たような奴らが出てきた。そして最後に、がたいのでかいグラサンをかけたいかにも「一番強くて偉いですよ」オーラを出したボスみたいな人が出てきた。

「あゝなるほど、そうゆうことですか。」

「そうゆうことだよ、ねえちゃん。物分かりいいじゃないか。」  
したっぱAに代わってボスっぽい人が口を開いた。

「そうですか。．．．つまりここに居る皆さん僕のストレス発散に付き合ってくれる。．．．そういうことですね。」

僕は少し笑顔でいった。

「．．．．．」数秒の沈黙。

「ククク．．．あっはっはっはっはっは」

ボスっぽい人が笑い、それに続くようにしたっぱたちも笑い出した。

「馬鹿かお前、恐怖で頭おかしくなったのか？」

「いえ、全然」

「あっ！！」

少しキレた様子で声を上げる。

「第一僕は、結構頭の良い学校でそこそ上位常連組なので頭は良いほうですよ。」

「そうゆうことってんじゃ．．．あゝなるほど。」

「どうかしましたか？」

「残念だがその手にや乗らねーよ。お前、俺様の直感だが格闘技がなんか出来るんだろう。」

「ええっ．．．まあ．．．そこそこ。」

意外に鋭いなボスっぽい人。

実は僕父親が格闘家で一応基礎は小さい頃叩き込まれた。

「つまり、お前は複数対一人でもズブの素人の集団にやられるわけ  
ないと考えているんだな。」

「ええっと・・・近からず遠からずですかね。」

「残念だったな、俺たちは素人じゃなんだよ。俺たちは全員格闘技  
経験者だ。」

「あっそうですか。」

そろそろボスっぽい人の説明あきたなあ。

「さらに教えてやるよ、俺の通り名を。」

「通り名？」

そんなもんあるのか意外に強いのかもしれないなこのボスっぽい人。

「俺の通り名は「つき月の狩人かりゆうじん」だ！」

「・・・・・・・・」

「どうだ驚いたか、あの伝説の不良は死んでなんかあったんだよ。」

ちなみに簡単に説明しておくとして「つき月の狩人かりゆうじん」と言うのは、2年前1  
年しか活動しなかったのに、この街の不良・ヤザ・指名手配などの  
無法者達を問答無用で病院送りにし突然姿を消した死亡説もある  
伝説の不良だ。

「・・・・・・・・」

「どうした、驚きすぎて声もでなくなっただか。」

「あの、言いづらいんですけど。」

「なんだ？」

「あなた「月の狩人」<sup>つきかりゆうて</sup>じゃないですよ。」

「なっなんだとー!!」

「だって・・・」

「そう、そのとうりだ黒髪意外ブス女！」

「だっ誰だ。」

うん、確かに誰だ今俺しゃべってたし黒髪は認めるけど女じゃねえし。それ以前に、とんでもないこと言わなかったか？

そんなことは露知らずカツアゲグループに割り込んできたそいつは間髪いれずに話し続けた。

「いいか「月の狩人」<sup>つきかりゆうて</sup>はてめーみたいな××が小さい代わりに図体でかい 野郎じゃなくてその黒髪意外ブス女の真逆の色でてめーみたいな 野郎の 色の髪とは比べ物にならないほど綺麗な白髪で爪はてめーみたいな 野郎の豚足とは比べ物にならないくらいとても鋭く大きく美しんだよこの「ピーーーーー」で「ピーーーーー」な「ピーーーーー」が分かったら「ピーーーーー」しながらとっとと帰れ「ピーーーーー」

「ーーーー」野郎。」

「「「「.....」」」」  
超沈黙

「うっうわー－－－－－－－－ん！おかー  
ーちゃあああん！」  
「「「まっまってください親分！！」」」逃げ出すボスっぽい人  
& a m p ; したつば達

「.....」  
.....」  
ハッいけない俺もびつくりしすぎてフリーズしてた。

改めて毒舌の人を観察する。内面の第一印象としては、「毒舌」意  
外なんにも無いが。見た目は、中性的なイケメン？で突き刺すよう  
な鋭い目付きで、髪はセイヤより少し長いから。セミロングとショ  
ートヘアの中間ぐらいで.....そんなことを考えてきたら毒舌さん  
(仮名)が話しかけてきた。

「おい、黒髪。」



「なっなんですか？」

「「テンガク」ってどっちだ。」

「えっと・・・あっちです。」

「・・・・・・嘘付け俺はあっちから来んだ。」

「・・・・・・本当です。」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「そうかじゃあな。」

こうして僕はセイヤが来るまでその場に立ち尽くして、一緒に遅刻した日。

僕は出会ってしまったんだ。

曇日陽射くもりひ ひだりというある意味運命で結ばれた女の子に。

### 第三話 「転校生は知り合い系」

2011年4月26日

「んで、こうするとこの公式に当てはまると言つことだ。ここテスト出るからな。」

きんこんかこんこん

「うつし、授業終わり。解散、あー腹減った。」

男の数学教師は、テキストに終わりにしてクラスメイト達は昼ご飯のしたくをする。

ちなみに今は説明するまでもなく昼休み。

さてと、僕も昼ご飯にしようかな。

ダダダダダダダダダ ガラガラバン

「アカリ、ごはん」

犬がやってきた。

「澄空さん、何回言ったらわかるの。廊下は走んないの。」

「だってだって今日アカリ朝ごはん作ってくれないしさあ。」

「自業自得」

「うーおかげで今日の抜き打ち小テスト1問も解んなかったよ。」

「いつものことでしょう、全く澄空さんは少しも勉強しないの?」

「うん!」

この犬っころ、元気に返事する場面じゃないだろう。

ちなみに僕とセイヤは1組と6組で離れているクラスなので、家にいるとき意外は昼休みと帰り道しか一緒にはいない。

「あとさあアカリ。」

「何？」

「その澄空さんってやめてくれない？」

「なんで？」

「なんでって、いつもはセイヤだから調子狂うし。なんか・・・こう・ムズムズするし。」

あーそついえばきちんと説明してなかったな。

「澄空さん耳貸して。」

「あっうん。」

（だってセイヤって呼ぶと色々噂が立つんだよ。）

（噂なにそれ？）

（僕とセイヤが付き合ってるって噂。）

「えっ！アタシとアカリって付き合ってたの！！」

ズcott 相変わらず理解力の乏しい犬ところだな。

「いや、そうじゃなく、つつつまり、アカリがアタシを犬扱いするのも今朝の参考書アタックもそーゆうことをするまえの訓練いや調教！つまりアタシがアカリの本当の犬になってワンワンする日いつか来るってことつまり・・・」

なんかセイヤがブツブツ言い出したりハアハアしだした。

「おいセイヤ。」

「さらに・・・して・・・だから・・・」

「セイヤー!」

少し声を強めて呼ぶ。

「はっはい!第一希望は普通でアカリの部屋がいいです。」

「セイヤなんの話してんの?」

「いいや・・・その・・・そっそっといえば、アタシ達いつから付き合い合  
ってんの!?」

はあ、やっぱり理解してなかったか。

「付き合い合っていないよ、そうゆう噂が流れるから親しく呼ぶのは止めて  
って話でしょう。」

「・・・へっ?・・・そうなの?」

残念そうにセイヤは聞いてきた。

「そうなの。」

ぼくはきっぱり言う

「・・・うゝゝゝアカリ!ごワン。」

あっ少し犬化した。そしてなんで機嫌が悪くなるんだろう。

「ハイハイ、ご飯ね。」

こうして、僕の昼休みが始まった。

「そっいえばアカリ、「暗闇通り」でなんでボーツとしてたの?」

「別に理由なんてないよ。しいて言うならなにか忘れ物ないかな、とか考えてただけだよ。」  
そっけなく返す。

「嘘でしょう。ダメだよ嘘ついちゃ。」  
あっさり見抜かれる。

「相変わらずの、野性の勘だな。」  
こいつは、嘘を見破ることに關してはもはや神の域だ。

「でっなんで？」

「・・・教えない。」

「え~~~~~。」

不満そうに声を出す

「ごめんねちよつと言いたくないんだ。」

だって、不良に絡まれてたら女の子が毒吐いて不良を追っ払ってその上この学校のこと聞かれてその女の子がきた方向だと言ったら疑われて・・・なんて言いたくない。

「そう・・・ならいいや。」

こういうところは、セイヤのいいところだ。あまり人に聞かれたくないところは、野生の勘ですぐ気がつくから深く追求してこない。

「お詫びに、今夜は好きなもん作ってやるよ。」

「本当！それじゃ唐揚げ食べたい。」

相変わらず肉食系だな。

「ハイハイ。」

そんな何気ない会話をしていたとき言った次のセイヤの話は僕の体温を3°ほど低くした。

「そういえば、こっちのクラスにね転校生が来たんだ。」  
「……………」

「どうしたのアカリ？ 滝みたいに汗かきはじめて。」

「…………いや…………なんでもない……………」

まさかね、そんなわけないよ。第一「テング」の場所聞かれただけだし決めつけるのは早い。

「それで、転校してきたのがすんごくかつこいい女の子で…………ってどうしたの！？ 机にうつ伏して！ 大丈夫！？」

「…………うん…………大丈夫……………」

そうだまだ希望はある。かつこいい女の子「毒舌さん（仮名）」とは限らないし

「うつうんそれでね、その転校生アタシたちより遅くってね3時間目ぐらいに来了んだ。なんでも道に迷ったらしくって、でも「テング」は大通りににめんしてるから普通迷わないはずなのにね…………ってどうしたの！？ 固まって、今にも崩れ出しそうな状態になって……………」

「…………いいから…………続けて……………」  
信じない、僕は絶対信じない。

「でっでね、その子の言った自己紹介の最後の言葉がよくわからないの。」  
「……………」  
すごく嫌な予感がある。

「ねえ、アカリ「ピーーーーーー」ってなに?。」

「ダウト」

「ーーーーッ!」

間違いない毒舌さんだ!

「いきなり大声上げてどうしたの?」

ナニ ドーシタ ケンカカ ガヤガヤ ワイワイ

「ほらっ周りの人たちもいるし。落ち着いて。」

「セイヤ!」

「はっはい!」

「ぜーーーーーーったいその転校生には近づくな!」

「えっなんで?」

「なんでも、わかったら返事!!早く!!じゃないと晩ご飯野菜炒め!」

「ワッワン!」

「ならいい。」

そつだよ、仮に毒舌さんが同じ学校にしようが同じ学年にしようがセイヤと同じクラスにしようが関わらなければ万事解決じゃないか。きちんとセイヤにも注意したし、第一セイヤと毒舌さんのクラスは6組僕のクラスは1組合同の移動授業でも一緒になることなんてないし、めったなことがない限り毒舌さんと会うわけなんてない。

「そつだよ。僕が気にしすぎなんだ。」

「・・・あの・・・アカリ・・・ちよつといい？」

「ん？なに？」

「その・・・言いにくいんだけどさ・・・だからね・・・あのー・・・」

なんだよと問い詰めようとしたとき。

「ワリーな星夜遅ほごくなつて。」

セイヤがビクウとなつて聞き覚えのある声が聞こえた。

「いやーこの購買以外に人気あんのな、おかげで前にいる邪魔なやつらのせいで遅くなつちつたぜつて・・・」

すんごく目が合つた・・・

「おおっ！？今朝の黒髪！！つーかさ、てめーなんで星夜と一緒にいんだ？」

「それは、こつちのセリフです。」

冷静にカウンターツツコミをいれる。

「ん？俺か、いやー実はな・・・」



まとめるようにした

両親の都合で、変な時期に転校となってしまうしかも大遅刻。てんぱってしまっただうすれいいかわからなくなってしまうを毒を吐いて全員ドン引きしかしセイヤだけは変わらず（意味がわからず）普通に話しかけてくれて友情成立と・・・

「これであつてる？」

「ああ、あつてゐるぜ。」

[illegible]

僕はゆっくりとセイヤのほうを向く。

「い、いやーすごいねアカリ簡単にまとめちゃうなんてさすが学年順位上位常連組ほんとにすg「晩御飯野菜炒め決定!!」」

「ワオ――」

—

ボタン  
セイヤ  
ノック  
ダウン

そうだよ、忘れてた。この犬っころ、人と仲良くなることについては嘘を見抜くことより得意（無意識）なんだった。こいつ3時間めと4時間目の間に仲良くなりやがった。

「なるほどお前が星夜の言つてた幼馴染か……。なんか女っぽいな。  
男の娘ってやつか」

さらりと気にしていること言いやがった。

「僕は男の娘じゃないです!!」

「なんだよやけに警戒心むき出しだな、俺なんかしたか？」

「今朝のこと覚えてないの!!」

「えっと・・・」

「僕に対して「黒髪以外ブス女」って言った!」

「あゝ言っただな」

「この・・・いい加減に!」

「ゴメン」

僕の怒りが爆発しそうになったとき毒舌さんは深く頭を下げてあやまった。

「・・・えっ?」

予想外の行動でフリーズする。

「本当にゴメン、あの場合その場に居た全員に毒吐かないと効果薄くなっちゃうんだ。仕方なく言っただとはいえ、本当にゴメンなさい。」

「・・・はぁ・・・わかったよ。もう

いいから頭上げて。」

「でも・・・」

「いいから」

毒舌さんは頭をゆっくり上げた。その顔はとても反省していた。

「もういいよ、僕も少し熱くなりすぎた。それに助けるために毒吐いたんでしょう?思ってたほど悪い人じゃないし。」

変な人だけど

「そうか、ありがとう。・・・それじゃあ改めまして曇日陽射だ。  
ヒザシと呼んでくれ。」

ヒザシは笑顔でてを差し伸べた。

「うん、よろしくヒザシさん。僕は月明狩竜人」  
僕はヒザシと握手をした。

これがクラスメイトがいる中で、すんごく恥ずかしいやり取りをしたヒザシさんとの、きちんとした出会いだった。

## 第四話 「お風呂イベントは間違い系」(前書き)

初のヒロイン視点導入

第四話 「お風呂イベントは間違い系」

2011年4月29日

曇日陽射と最悪な出会いと意外にきちんとして、そこそこな好印象？な出会いの2つの出会いをした日から三日後・・・

「うんめえ~~~~!!アカリお前こんなにうまい飯作れるのか!?さすが男の娘!」

「あーっ！ヒザシちゃん勝手にアタシのタコさんウィンナー取るな！」

「別にいいだろ、ワインナーぐらい。」

「よくない！だってタコさんだもん！」

「なんだよ、その理由。」

「ほら、セイヤよしよし　また作ってきてあげるから。」

セイヤの頭をなでる。

「ウ〜〜〜・・・クウン」

「おっやっぱし犬っぽいな星夜は、よし俺も．．．」

「ワン！（がぶり）」

「いったー！！！！」

「じゃ、セイヤ！ダメでしょう！」

「グルルルルル。」

もう完全に犬だな。

「あとヒザさん、僕男の娘じゃないから、後勝手に人のモノとつ

「ちゃダメだよ。」

「そのところは、さすがに無視出来ない。」

「そんなアカリ、俺のぶんの弁当も作ってくれよ。」

「ん？別にいいk「ダメ！アカリのお弁当を食べる権利があるのは、幼馴染の私だけなの！」

「えー別がいいじゃん。」

「ダメッ！絶対ダメッ！」

「ちえっ、わかったよ。」

「いやいや、決定権あるの僕だからね。」

・・・自分でもびつくりするほどなじんでいた。

「それにしても第一印象とは、全く違うよね・・・」

僕は、ヒザさんのほうを見ながら呆れ半分の感じでつぶやいた。

「そうなのか？」

「そうなんだよ。」

「どこらへんが？」

「・・・怒んない？」

「俺の第一印象怒るようなことなの！？」

「だって・・・」

普通、助けてくれたとはいえ不良と赤の他人にいきなり毒を吐くような人に好印象なんてもたないし、逆にこれからは関わらないようにしようと思えるのが一般的だと僕は思う。

「あつ！でも第一印象が怒るようなことでも、全然違っことは今は好印象ってことだよな。」

「うん・・・まあね。」

嘘は言っていない。

実際、ヒザさんは目つきは悪いし見た目は不良っぽいけど話してみればすごく楽しいし、そしてなにより・・・

「そうだ、イイこと思いついた。弁当作ってくれないならさ、今日晩飯食いに行っればいいか？」

「はあ！？なんでヒザちゃんがアカリの家にご飯食べに行くのさ！」

「別にいいじゃん、それにさっき言ったように決定権はアカリにあるんだしさ。」

「ウ~~~~~」

・・・毒を吐いていない。・・・いや当たり前っちゃ当たり前なんだけど、今のところセイヤから転校したときにテンパって間違えて毒を吐いたって話しか聞かないし・・・

「・・・リ・・・カリ・・・アカリってば！」

「へっ？」

「どうしたのアカリ？ボーツとしちゃって？」

セイヤが顔をのぞき込む

ドキッ セイヤといえど、いきなりこんなに近くに来ると恥ずかしいな。

「ちよつちよつと考え事してただけだよ。」  
ごまかしながらセイヤから離れる。

「そんなことより晩飯の件、別にいいだろ？」

「えっ・・・あーそうだね、まあ別に断る理由ないし。」  
「うっしや！」

「ちよつとアカリなんでOKするのさ！」

「だから断る理由ないからだよ。」

「ウ~~~~~」

「それにアカリさ、なんでヒザさんが家に晩ご飯食べにくること反対するの？」

「なんでってそれは・・・その・・・」

なんでモジモジしてるんだこいつ？

それに、なぜか普段はヒザさんと仲いいのに僕のことを絡むと色々意見してくる（というより不満をぶつける）。

「・・・・・・・・」

なんかヒザさんが考え込んでる。

「どうしたのヒザさん？」

「えっ、いや別に・・・そんなことよりさアカリは何が作れるんだ？」



「ん〜基本レシピと材料がそろえばなんでも作れるよ。」

「んじゃ〜俺は和食食いたい!」

「和食?」

意外なジャンルだな、ヒザさんはてっきりセイヤと同じ肉食系だ  
と思ってたのに。

「作れない?」

不安そうに聞いてくるヒザさん

「大丈夫、作れるよ。」

「ホントか!」

子供みたいに喜ぶなあ。

「え〜〜お肉じゃないの?」

「セイヤはお肉食べすぎなの」

「う〜〜・・・まあいいかアカリの料理はどれも美味しいね。」

「じゃあ悪いけど、帰り道二人で醤油買ってきてくれない? ちょうど切らしてて。」

「アカリは?」

「ちよつと雲行きが怪しくなってきたから、先に帰って洗濯物取り  
込まなくちゃ。」

「わかった。」

き〜んこ〜んか〜んこ〜ん

「んじゃ、よろしくなアカリ。よいこうぜ、星夜。」

「あつ、まってヒザシちゃん。」

「またね。」

さて次の授業はなんだったっけな。

視点 すみそらほしよ  
澄空星夜

「星夜はなんでアカリのこと好きなんだ？」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あれーおかしいな幻聴が聞こえる、疲れてるのかな？そんなことよりお醤油買わないと。

「ねえ、ヒザシちゃん。」

「ん、なに？」

「お醤油にも薄口とか濃口とかあるけど、どれ買えばいいのかな？」

「テキストにCMで流れてる有名なでいいんじゃないの。」

「それじゃあ、これでいつか。」

「いいと思うぜ、それでなんでアカリのこと好きなんだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・へっ？」

あれ？幻聴じゃない・・・あーなんだヒザシちゃんが質問してるのか。えーっとなんだっけ・・・アタシがアカリを好きな理由か・・・

「……………なつなななななななでそそそのことをしているんだにや！！（カアアアアアアアアア）」

顔が赤くなるのがわかるくらい熱くなった。

「落ち着け、キャラぶれてるぞ。はい深呼吸。」

スーハー スーハー…

「んでどうして好きなの。」

「ボフウッ ゲホッゲホッゲホッ ハアハアハアハア いったいきなりなんでそんなこと聞くの！？てゆーかなんで知ってんの！？」

「いやいや、きずかないほうがおかしいだろ。」

「そっそうなの？」

「うん実際わかりやすいし。」

「そう…なんだ…。」

つつつまりアカリ自身も知ってる可能性もあるかもしれない、とゆうことは…………

《セイヤ、やっと二人きりだね。》

《どっとうしたのアカリ？》

ガバッ

《キャッ》

《もう我慢できない、今日からセイヤ…いや星夜は俺の本当の犬だ》

《あっアカリ……………らめえ……………》

「んで、そのあとにあんなことやこんなことも!!（ハアハア）」

「妄想中悪いんだけど、アカリは全然きずついてないよ。」

「ワラン!?（マジで!?!）」

「犬化しないでくれ。」

「たっ確かに、きずついていれば今までチャンスはなんどもあったしね・・・はあ。」

「それでな、なんでそんなこと言ったのかつつと、俺は別にアカリを取るうとしてるわけじゃねーから普通に接してくれってわけよ。」

「うつ・・・ゴメン・・・」

「いいよ別に。応援してるから頑張れよ。」

実際アタシは、もしかしたらヒザシはアカリが好きで取られると思つて、セイヤが絡むと色々意地悪なことを言ってしまった。それなのにヒザシちゃんは・・・

「うえ~~~~ん、ヒザシちゃん~~~~。」

「どうしたいきなり!!」

「うえ~~~~ん。」

「分かったから泣くなよ!」

「うんわかった。」

「泣き止むのはやつ!」

「元気なのが取り柄だからね ヽ」

「・・・さいですか。」

「いやゝゝそれにしても、土砂降りなんてスーパーから出るまでわかんなかったよ。」

「ホントに最悪だな。んでここがアカリの家か？」

「うん、私の家はこの家の右隣なんだ。だからこの家は、アタシの第二の家みたいなもんなんだ。」

「ふーん。」

「それにしても・・・ヒザちゃんもやっぱり女の子なんだね。（ジー）」

「はっ？・・・！！おっお前なに見てんだ。」

そんなこといったって今アタシたちは雨に濡れてびしょびしょつまり・・・

「透けてるんだから、見るなって言われても無理でしょう。」

「それでも見るな！」

「アタシより大きい」

「だから見るな！」

「ゴメンゴメン、お風呂場行ってタオル貸してもらおう？。」

「全く。」

このときアタシは予想しておけばよかったんだ。

「さっさいっ。」

「おい、靴ぐらいきちんとしておけよ。」

「やっというて、タオル持ってくるから。」



なに今の音！！

「ちよっシャワーヘッドは結構痛いから、普通は「キャーッエツチ」みたいにお湯かけるものだら、ちよっほんとに、」

「少しは、状況と言葉を考える――――！！」  
「ウォー――――ン」

死を覚悟した瞬間

「なにやってんだセイヤ？」

「えっヒザさん！？つておわぁ」

「ワラン！？」

ボタン

「いったたたたた・・・あつ。」

「いつてててて・・・えっ。」

・・・状況を説明すると、シャワーノズルに足を引っかけたアカリ（半裸）がアタシ（服が透けてる）の上に倒れてきて覆いかぶさっていた。これをヒザちゃんが見ている。

「な・・・なに・・・してるの？」

「・・・・・・・・えっと・・・・・・・・た・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・た？」

「正しいお風呂イベント？」

「.....」  
「.....」

「なわけあるかこの「ピーーーー」が！..」

「ここで毒舌か.....」

アカリのツッコミが響いた。



#### 第四話 「お風呂イベントは間違え系」(後書き)

そろそろ主人公の姉出したいなあ

第五話 「お姉ちゃんの変態系」(前書き)

主人公姉登場

## 第五話 「お姉ちゃんの変態系」

2011年4月29日

視点 くもりび ひザシ  
曇日陽射

「ヒザさんごめんね、変なところ見せちゃって。」  
セイヤがテーブルにお箸をそろえながら謝る。

「もういいって言うてんだろ、別にわざとじゃないんだし。」  
俺もセイヤを手伝いながら返す

「でも・・・」

「だからいって、俺も言いすぎたしさ。そんなことより・・・」  
「ん、どうしたの？」

「いや・・・もういいんじゃないか？」  
「なにが？」

「なにがって・・・（チラッ）」

俺はとなりの部屋を見る、そこからは・・・

「アカリ~~~~~（ドンドンドン）（ごめんなさ~~~~~い）ド  
ンドンドン）もうしないから~~~~~（ドンドンドン）（ここから

だして~~~~~(ドンドンドン)」

「さあセイヤちゃん！あきらめてぬぎぬぎしてこのメイド服を着るんだよね？」

「いやー！ココさーんや~~~~め~~~~て~~~~」

ボタンバンドテッ マテーー ヒーイヤーー

・・・なんかセイヤの叫び声が聞こえる

「大丈夫、うちのココ姉は変態だけど犯罪をするようなクズではないから・・・多分」

「多分!？」

セイヤのアネキってどんな人なんだよ

「うちの姉は月明狩虎子つきあかり こしって名前で、見た目だけならすごく綺麗なんだけど・・・」

「だけど?・・・」

「いやー！ほんとにやめて!」

「よいでわないか、よいでわないかなんだよね？」

「よくないですからー!」

「その涙目そそるんだよね？」

「聞いているのとうりの女の子ずきで、特にセイヤが大好きなんだ。まあセイヤのほうは苦手なんだけどね。」

「よっよく今までこの家にセイヤは出入りできたな。」

「ココ姉はウルトラニートだから。」

「ウルトラニート？」

「ほらっウルトラマンって、地球じゃ1日3分間しか動けないでしよう？ココ姉は、自分の部屋から1日3分間しかでられないんだよ。」

「それダメ人間じゃないの!？」

「うん、そうだよ。」

あっさり肯定しやがった!

「いやいや自分の姉だろが!」

「まあ事実だし・・・でも、株とFXで稼いで生活費と学費は払ってくれるから結構いい姉だよ。」

「ネオニートだよなそれ!？」

・・・あれ？生活費と学費？

「なあアカリ、お前の親は？」

「・・・・・・・・」

あれっ？なんで黙るのもしかして地雷踏んだ!？

「なっなあアカリ」アカリ~~~~(ドカンッ)たすけてー」  
セイヤがドアを突き破ってきた。

どんがらがっしゃーん・・・

「いつてててて・・・えっ。」  
「いったたたた・・・あっ。」

あれっなんか少し違うけどデジャブ？

「・・・あの・・・その・・・いや・・・わざとじゃなくて・・・」  
あゝこりやまた怒られるな・・・と思ったら。

「せっセイヤ早くどいて。（カアアアア）」  
アカリがなんか赤くなる・・・あっそうゆうことか。

「どうしたの？怒んないの？」  
きずいてないのか。

「セイヤ自分の姿見てみ。」  
「えっ？・・・！！！」

セイヤは犬耳と犬手袋をした状態で少しみだれたメイド服を着てアカリの上にまたがっていた。

「・・・・・・・・わっワァー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・ン！！！！！」

こんなときでもワァーーンて言うんだな・・・

## 第五話 「お姉ちゃんの変態系」(後書き)

次回は虎子の詳細書きます。後、年末年始は休みます。

## 第六話 「恋バナは暴走系」

2011年4月29日

「改めまして、リュウちゃんの姉でセイヤちゃんの恋人の「月明狩<sup>つきあかり</sup>虎子<sup>こ</sup>」なんだよね？ヨロシクなんだよね？ヒザシちゃん。」  
「彼女じゃないですよ！」

ちなみに竜ちゃんとは僕のことである。そしてここはココ姉の部屋

「よろしくお願いします。え〜と・・・」

「ココさんでいいんだよね？もしくはお姉さまでもいいんだよね！？」

「遠慮しておきます。」

「残念なんだよね？」

ココ姉が肩を落とす

「ところでココさん。いくつか質問いいですか？」

「ん？なんなんだよね？」

「ちよつと見た目の質問なんですけど・・・」

「えーと上から・・・そういうんじゃないです。」

「違うんだよね??」

「はい、ぶつちやけかないそうにありませんから・・・色々・・・」

「まあココ姉はモデルみたいだからね。」



ココ姉は、出るところ出てるししまるところはしまってるし身内の僕から見ても完璧なプロポーションだし、とてつもない美人だ。でも・・・

「ありがとうなんだよね？お礼に今日は可愛がってあげるんだよね？（ハアハア）」

「全力で拒否します。」

「またまた残念なんだよね。」  
ホントなんでこんななんだろう？

「それで、ココ姉に聞きたいことってなに？」

「いや、アカリでもいいんだけどさ、なんで髪の色がセイヤが黒髪でココさんが白髪なんだ？」

しまった！（ビクウ）

「あゝそれはなんだね？リュウセイ「ココ姉は遺伝の関係上そうなっちゃたんだよ！！特に！全然！これっぽっちも！深い理由なんてないから！」

僕は全力でヒザさんに理由を説明する

「そっそうなのか。」

「そうなんだよ！」

「いや竜ちゃん、そうじゃな」「セイヤ！ヒザさん！お腹すいたでしょ！もう晩ご飯出来てるからリビング行こう！ココ姉にもすぐ持つてくるから！」

「ちよっセイヤどうしたんだよ？いきなり？」

「いいから早く!」

「ちよつとまってアカリ、ヒザシちゃん。」

無理やりヒザシさんを引つ張り出す。その後からセイヤもついてくる

「あつちよつとみんな・・・あゝ行っちゃったんだよね?もしかなくても、竜ちゃんまだあのこと話してないんだよね?少し失敗しちゃったかなんだよね?」

「うんめえゝゝゝゝ!!アカリお前は天才なのか!?さすが男の娘!」

「それほどじゃないよ。後、男の娘じゃないって言ってるよね僕(イラッ)」

なんとか髪の色話題はそらせたな。

「確かにこれはセイヤがほれ」「わー!ー本当にこの煮物美味しいね!」

いきなりセイヤがほめる。そして、ヒザシさんと後ろをむいてヒソヒソ話し始めた。なんだろう?

(ちよつとヒザシちゃんに言おうとしてんの!?)

(わりいわりい、でもさあアカリは全然きずいてないし。俺が仲介役として仲をもったほうがいいんじゃないの?)

(別にいいの!)

「ねえ、なに話してるの？」  
いじらしくなり聞いてみる

「えっ・・・いや・・・その・・・あつ恋バナだよ！」

「ヒザシちゃんそれ禁句！」

「えっ？」

恋バナ？（ぴくっ）

（ガタン）

「えっなにどっちの話！！セイヤ？それともヒザシさん！セイヤの場合は高校生になってからクラス別になったから僕の知らないクラスメイト？ヒザシちゃんの場合は前の学校のひと？まさか転校してきてから偶然出会ってそこから急展開！それでどうなのだったの！？」

僕は真実を確かめるべく問いただす。

「えっなにどうしたの？俺なんか変なこと言った！？」

「アカリ落ち着いて！」

「はっしまった。そうだよね僕だけがしゃべっても詳しいこと話せないもんね。でっどっちの話なの？」

「どうしたんだよ正直テンションが「ピーーーーー」で「ピーーーーー」で「ピーーーーー」なんだけど。」

「毒舌はいいから、早く！」

（ちょっとこれどうゆうこと？毒舌効かないだけど。）

（アカリは三度の飯より恋バナずきなんだよね・・・暴走するぐらい。）

（マジで！どうすればいいんだよ？）

（普通に恋バナ聴かせればおさまるけど・・・）

（よし任せた。）

（なんで！？）

（考えれば告白するチャンスじゃね？）

（無理、まえ似たようなとき告白したら「冗談とかじゃなく真面目に恋バナ語れや！」って激怒されたから・・・）

（うわぁ・・・）

（そっちこそなにかないの）

（へっ？いついや・・・そっその・・・）

（その反応あるんだね。じゃ、任せるよ）

（いやっちよつと・・・）

「実はね、ヒザシちゃんの恋バナなんだ！」

「そうなんだ！でっどんな恋バナ！？失恋系、片恋系、成就系、泥沼系、どれよ？」

（なんか、無駄に詳しいんですけど！）

（腹をくくったほうがいいよ、こうなると止められないから。後個人的に聞きたいし。）

（うっっっ・・・分かったよ。）

「絶対に笑うなよ。」

「笑わないよニヤニヤするだけ。」

「てめえ・・・」

「落ち着いて、もうしょうがないから。」

「ぐっ・・・」

「んで、なに系」

「新幹線見たく言うんじゃないよ！」

ワクワク ワクワク

「そっ・・・その・・・片・・・恋・・・系・・・」

ニヤニヤ ニヤニヤ

「相手は？」

「そっその・・・あつ相手は・・・」

ニヤニヤ ニヤニヤ

「つ・・・」

「つ・・・」

「つき月の狩人かりゅうじんだよ。なんか文句あつか!!」

瞬間、俺とセイヤが固まる。

「へっ？」

「なっなんだよ二人そろって聞き返して。」

「・・・」

二人で顔を見合わせる

「ええ――――――――――」

「――――!!」

「ちょっと驚きすぎじゃないか？まあ理由はわからなくもないが。」  
「いやいやいやそっじゃなくて実はムゴウ」

僕は速攻でセイヤの口をふさぐ。

スーハー・・・

「どうして月の狩人<sup>つきかりゅうじん</sup>を好きになつたんだ。」

「なっなんだよ急にシリアスになつて。」

「いいから答えて。」

「そっその・・・あれは中二の秋のことだ・・・」

そう言ってヒザさんは話を切り出した

第六話 「恋バナは暴走系」(後書き)

次回、曇日陽射過去話<sup>くもりび ひざし</sup>

第七話 「過去話はシリアス系」(前書き)

タイトルどうしようか悩みました。  
結果ビミョーになりました。



## 第七話 「過去話はシリアス系」

2009年10月17日

視点「曇日陽射」  
くもりび ひざし

「たくつ嫌な天気だなあ。降んなきゃいいんだけど。」  
雨雲のせいで、せつかくのシヨツピングも気分が乗らない・・・いやこれは自分への言い訳か。

「なんで俺が女物の服なんて・・・いやしょうがないか。」

俺は昔から男まさりの勝気な性格で、小学校卒業するまでは男の子と遊んでいたぐらいだ。中学生になるとときにはちゃんと親しい友達もできて、昔の男友達と遊ばなくなった。しかし中学校では少しだけ周りの女友達とズレがあった。

ズレといってもいじめというわけじゃなく「とても仲のいい男友達」みたいな、そんなかんじに友達から扱われるのだ。

それが俺は少しいやだった。

しかし、それはみんなが無意識でやっているもので注意するのもしんか気が引ける。そこで俺は・・・

「うっっん・・・どんな服がいいんだろう?」

実は、次の日曜日仲のいいクラスメイトと映画を見に行く予定なのだ。そこでいつもよりおしゃれで女の子っぽい格好していけば、みんなの態度も変わるはず！・・・しかし

「やっぱ事前に調べておくんだっとな。」

いつもジャージだからどれがいいのかわかんねえ

「どうしよう。」

「どうかなさいましたか？」

途方にくれていたところ店員さんに声をかけられた。

「えっ？・・・！・・・あっあの・・・その・・・ええっと」

ヤバイいきなり声かけられたから、なに話でいいかわかんねえ

「そっそのかつ可愛い服を探してます！！」

わー！・・・なんだよ可愛い服って！！

「承知いたしました。では、こちらの服はどうでしょうか？」

「はっはい。いいと思います。」

「では試着室はこちらです。」

「はっはい！」

そのまま流れで試着することになってしまった。しかし・・・

「こっこれを俺が着るのか。」

手渡されたのは、フリフリのついた白い、いかにも女の子っぽい服だった。

「いついやここで着なくちゃ女じゃねえ！」

自分でもなに言ってるんだと心の中でツッコミながらその服を着る

「すつすいません。」

「はい、なんででしょうか？」

「こっこの服似合ってますかね？」

「すごく似合ってますしやいます。」

「ほっ本当ですか!？」

「はい。とても可愛いですよ。」

「カッ可愛い(カアアアア)」

可愛いなんて両親意外に言われたことがない……

「他にも色々とお似合いそうな服があるんですけど、どうなさいますか？」

「試着します!！」

「いや〜いい買い物したな〜！」

あの後、店員さんに褒めてもらった服を着てそのほかに買った3着とアクセサリー・ショップで買ったブレスレットを身に付けた俺は超上機嫌で公園のベンチで休んでいた。

「つい昨日までなら、ショッピングになんであんなに時間かかるんだよって思ってたけど。今ならその理由が手に取るようにわかるよ。」

改めて俺も女の子なんだと再認識する。

「やっぱこれからはもっと女の子らしくするべきだな。(うんうん)」

一人で頷く俺……

「今度から「俺」じゃなくて「私」って言おうかな。」  
そうしたほうがいい、せっかくの機会だしこれからは女の子っぽくしよう。そっそしたらかつこいいかつかか彼氏とかも出来るかもしれないし！

そんなことを考えてたら後ろから声をかけられた。

「ねえ君〜一人〜可愛いね〜」

「かつ可愛い！」

じゃねえよ俺！・・・じゃなくて私！こんなふうに声をかけてくるってことは・・・

「ねえオレらとお茶しない？」

「ケッコー楽しいyo」

やっぱりナンパか。しかも3人

「結構です。」

「可愛い服着てるのに、結構ツンツンしてるね君。」  
もう〜ウザいな

「用事があるんで。」（タッタッタ）

こうゆう場合は逃げるが一番、それで近くの交番にでも駆け込もう。

「お〜い君これ忘れてるyo」

「えっ？あつ！」

しまった

ナンパしてきた男の手にはさっき買った服やブレスレットが入った紙袋があった

「返してください!」

慌ててもどって返却を求める

「ん〜どうしようかなあ〜お茶に付き合ってくれたら考えてあげるよ。」

「ふざけんな返せ!」

つい、いつもの男口調で文句を言ってしまった

「あつ・・・てめえ・・・少し優しくすりゃあつけあがりやがって・・・」

「優しくしろなんて頼んでねえだろ!」

「そうかよ・・・オイてめーらそいつ抑えてろ!」

「了解」

「わかったyo」

「テメツ・・・この・・・はなせ!」

両腕を後ろでつかまれて動けなくなる

「大丈夫だよ、テメーみたいなガキ殴ったところで面白くねえ・・・だから・・・」

男は紙袋の中身を地面に落とした

「なにすんだ!」

「こっするに・・・決まってるだろ!（グシャア）」

男が思いっきり中身を踏んずける。

「ああっ！」

「こいつ「ああっ！」ていったよ」

「うわーひっでーでもウケる。」

男達がケラケラ笑う。

「止める！」

せっかく買ったのに・・・

「え〜聞こえないな〜（ダンドン）」

「止めろって言ってるだろ」

初めてオシヤレしようと思ったのに・・・

「だから全然聞こえませ〜ん。（グリグリ）」

「止め・・・て・・・」

クラスみんなに見せたかったのに・・・

「あーあーき〜こ〜え〜な〜い（グシャア）」

「止め・・・て・・・よう・・・お願いだから！止めてよおー！」

楽しい思い出になるかもしれないのに・・・

「止めるわけねえだろ、バアア力」

「うつ・・・うわああああああ・・・止めてよ・・・お願いだから・・・お願いだから・・・」

変わろうと・・・思ったのに・・・

その瞬間

ヒュン ヒュン ヒュン

なにかの音がした気がした。

「うるせえな！元はテメエが悪いんだろっが！」  
男が腕を振りかぶる

（殴られる！）

「ちよっお前！どうしたんだその傷！」  
腕を抑えている不良のうち一人が殴りかかろうとする不良に言う。

「あっ？なっなんだこれ！痛てえ！お前らこそ！どうしたんだその傷。」

「なっなんで血が！？」

「why！？痛てえyo」

（なにが起こったの？）

男達はそれぞれ、殴りかかろうとした腕、後ろでつかんでた手が少し切れていて血を出していた

「どう？狩られた感想は？」

「はぁ!？」

公園の入口から声が聞こえる

「なっ なのもんだ!？」

ヒュン ヒュン ヒュン

(まただ、なにこの音)

「別に君たちに名乗るために近づいたんじゃないから、どうでもいいけど早く止血したほうがいいよ。今度は右肩を狩ったから。」

「はっ? うつつわぁ!!」

「なんで! いつのまに!!」

「痛てえ yoooooooo!!」

いつのまにか不良3人の右肩から血が出ていた

「要件は二つ。1、その子から離れて。2、視界から消えて。早くしてくれる? そうじゃないと・・・」



「次は命を狩るよ。」

「うわぁーーーーー化け物ーーーーー!!」

「まってくれ!おいていかないで!!」

「help me 助けてーーーー!!」

「・・・・・・(ポカン)」

「これはひどいね。」

いつの間に不良を追っ払った人が近くに来ていた。

夕方、しかも曇のせいか顔はよく見えない。しかし、輝いているような白髪に獣のような鋭く大きくそして美しい一本の爪はよく見えた

「あゝこんなに可愛い服なのにね。本当なら動けなくなるまで狩ろうと思っただけど、さすがにそんなグロテスクなところは女の子には見せられないしね。」

「・・・・俺の・・・・服が・・・・うつ・・・・・・うう・・・・・・はじ・・・・めて・・・・オシヤレ・・・・しようと・・・・思ったのに・・・・」

「……………」

「可愛く……変わろうと………思ったのに………」

こみ上げてくるのは

怒りよりも……

悲しみよりも……

悔しさよりも……

なにより挫折感だった。

「変わらなくても、いいよ。」

頭に手が置かれる。その手はとても暖かった

「変わらなくてもいい。だって君は………」

「今だって十分可愛いから」

「・・・・・・・・！！・・・・・・・・うつうつ・・・・・・・・・・うわあああああ  
あああああああああああ・・・・・・・・・・・・・・・・」

その後のことはよく覚えてない。

気がつくと自分の部屋のベットで寝ていて。お母さんに話を聞くと  
昨日はふらふらと帰ってきて晩ご飯もお風呂も入らずに寝てしまっ  
たと言う。

最初はあれは夢なのではと疑ったが。ボロボロの服とブレスレッド  
が紙袋に入っていたので夢ではなかったらしい。

その日から、よくあの人の夢を見るようになった。夢から覚める度  
心地の良い胸のドキドキと切ないような胸の苦しさに襲われた。

助けてくれた人が月の狩人<sup>つきかりゆて</sup>と噂で分かったのは一ヶ月後

そして、夢から覚めたときの感情が恋心だときずいたのはもう少し  
先のことである。

## 第八話 「友人も変態系？」

2011年 4月29日

「……という訳だ。なんか質問とかあるか？」

ヒザさんの恋バナが終わり、いつもの僕なら根掘り葉掘り聞く質問タイムになったのだが・・・

.....

「どうした、アカリ？心ここにあらずみたいな顔して？」

「ンーッ、ン、ン、ン、ン、ン……！」

「後、セイヤの口そろそろ開放してやれよ。」

「えっ？．．．あつごめん！」

すっかりセイヤの存在を忘れていた。

「ぶはあーハアハア……ヒザシちゃん今の話ホント？」

「あつあゝ、ホントだぜ。」

「ふーん……つまり月の狩人は知らない女の子に可愛いか言っちゃうキザ男なんだね〜。」

「そっそうだね。」

いやーお茶がうまいな〜（ズズ〜）

「そんなこというなよ。一応未来のお嬢さんになる相手だぞ！」

へへへ 未来のお嬢さんにね……

「ボファアッ  
ゲホッゲホッ  
へホッ  
なにのいってのんお!？」

「落ちて着いて話してくれないかな？」

ヒザさんが冷静につっこむ

「いやいやだってヒザさん！おかしいでしょ！」

「なにが？」

「いやいやいやいやなんでわからないの!？」

「そんなじつよりさあ……」

「そんなことより!？」

あれ？この状況で使う言葉だっけ？

「セイヤがなんか恐いんだけど。」

「えっ？」

「そんなの嘘だ そんなの嘘だ そんなの嘘だ そんなの嘘だ そんなの嘘だ  
んなの嘘だ そんなの嘘だ そんなの嘘だ そんなの嘘だ そんなの嘘だ  
の嘘だ そんなの嘘だ そんなの嘘だ そんなの嘘だ そんなの嘘だ  
だ そんなのうそだ そんなのうそだ そんなのうそだ うそだ  
うそだ うそだ うそだ うそだ うそだ うそだ ウソだウソだ  
ウソだウソだウソダウソダウソダうそうそうそうそうそうそう  
そうそうそうそ．．．．．」

「セイヤさー！ー！ー！ー！ん！！！」

訂正します。「そんなことよりも」はこうゆうときにこそ使うものでした。

「ちよつとセイヤ恐いよ！！どうしたの！？ねえ！！正氣に戻つて  
 っっっっ！！」

僕は心の底からセイヤに訴えた（軽く半泣き）

「うそうそうそうそ．．．．．はっ！．．．はっ！．．．はっ！．．．私はダレ？？」  
「さっきの話の真相はナニ？」

「よし！いつものセイヤだ。」

「それもひどくない？」

「そんなことよりも今は解決すべき問題がある！！」

「ヒザさん！！なんでどうしてそうなっちゃたんだよ！！」

「そうだよヒザちゃん！！いつからなの！？」

「えっと．．．なにが？」

「なんで月の狩人と結婚することになってんの！？」

「なんでって．．．そんなの．．．」

「「そんなの．．．？」」

「俺が惚れたからだ！！」

「．．．．．」

「俺が惚れたからだ！！」

「．．．．．」

「俺が惚れたk「いやもういいよ。」

「そうか。」

「．．．．．」

「・・・・・・でっ?」

「でっ?てなに?」

「いやいやなにかあるでしょうほかにも。」

「告白したとかされたとか。」

「別がないよ。」

「・・・・・・」

なにこの沈黙

「えっと・・・つまり一度しか会ったこともないし告白もなんにもなく月の狩人と結婚すると?」

「そうゆうことになるな。」

「・・・無理じゃないの?」

「無理じゃない!なぜなら・・・」

「俺が月の狩人を愛してるからだ!」

「・・・・・・(完全に危ない人だ)」

「どうしたんだ?」

「・・・なんでもない。」

「・・・うん、あたしも。」

「そうか？」

今日は友達の意外な一面を知りました（知りたくなかった）

ティロリン 僕のケータイが鳴る

「ん？電話か？」

「いや、メール・・・ココ姉からだ・・・えっ!？」

僕は慌ててカーテンを開け外を見る

次の瞬間 ザアアアアアアアアア

豪雨が降り出した。



第八話 「友人も変態系？」（後書き）

お泊りフラグ発生！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7675z/>

---

このこのこ！～男の娘のこんな日常～

2012年1月5日20時49分発行